

選する所であらうが、之が聲を大にして論ぜらるゝ所以のものはかゝる意義をもつからに外ならぬを考へる。

幸にしてこの小論がこの方面の研究に何等かの刺戟を與へ、今日各方而から注目されてゐる人口食糧問題解決に對する鍵ともならば無上の光榮とする所である。

齊民要術の異版につきて

九州帝國大學教授 小 出 滿 二

齊民要術は古農書として支那で最も注意すべきであるのみか、之を泰西のそれに比して亦大に誇つてよい述作である。たゞ從來通行の刊本は何れも誤脱極て多く、最近に至り餘程よい校訂本が出たのであるが、尙ほ缺文もありて完備とは云ひ得ないのである。元來この書の古版は本場の支那では早く散逸したのに我が邦には殘缺ながら現に傳へてをり、且つ其の古版に據つた舊鈔本が保存せられてをるが、未だ嘗て之を通覽した人がなかつたらしい。私も豫て心掛けてゐたので漸く宿望を遂げ、此等の諸本を對照校合して略ぼ完備の域に達せしむることが出來た。大原氏の研究所では古典の蒐集もやつてをる。今回の記念祝典を機とした學會で此のことを報告し得るのは甚だ愉快である。

斯書は約千四五百年前の後魏時代の編述で、我が邦に早く渡來してゐたことは寛平年中（西歷八百年代の末）の日本國現在書目に既に載つてをるから分るが、未だ印刻されないで書寫して傳つてゐたのである。支那で農書と名づくべきものは他にも以前に數種あつたが、今は纔に斷篇を傳へてをるに止まり、而かも其の多くは實に斯書に引用されて残つ

たやうな次第である。初めて印行されたのは北宋天禧四年（西歷一〇二〇年）といふが、その斷片すらも現に残つてをらぬ。次で天聖中（一〇二三乃至三一年）に出版したのを崇文院本と呼んでをるが、之も支那には一も残存してをらず我が高山寺に傳へた零本二卷は此の刊本らしい。南宋紹興十四年（一一四四年）に第三版が出たのであるが、僅に百年ばかりの間に崇文院本が殆ど見られぬやうになつてゐた。更に明嘉靖三年（一五二四年）に刊行した時には苦心して漸く纏め得たが、誤脱が甚だ多く殆ど通讀し難いものとなつてをる。以來數十回を重ねて板行せられ、珍重して多くの叢書中にも採收されてをるが、大抵は別刊に基いたので甚しきは一枚二枚を脱落したまゝ、我が文政年間に翻刻したのも同様なものである。尤も別に宋刊によりて書寫した鈔本は二三傳つてゐたので、第七卷半までは稍や備ふることが出来光緒二十二年の漸西村舎本は大に優たものであつた。最近に至り民國十一年に出た上海の涵芬樓四部叢刊本は明鈔本影印で更に良好なものゝ云ふべきであるが、今一歩さういふところで尙ほ未だ完全とは稱し難く、例へば第九卷なきには缺文があつて讀み得ぬ所もある。

然るに我が邦には高山寺に傳へた崇文院本が第五第八の兩卷あり、且つ此の同じ北宋刊本によつたと思はるゝ鈔本が現存してをる。第三の一巻を缺いでをるのは惜しいが、餘の九卷は揃つてをつて從來の誤脱を補正し得るものが甚だ多い。此の宋本は鎌倉時代のもので有名な金澤文庫本であり、徳川家康の御讓本として現に尾州侯家に珍藏されてをる。從來この卷子本のあるとは知られてゐたが何故か眞福寺藏と誤傳せられ、未だ誰も手をつける機會が無かつたらしい。今や昭代の餘澤で古版の殘缺を校宋本や明鈔本を照合し、且つ金澤文庫舊鈔本によりて通行本の誤謬を訂正し得たのみでなく、四部叢刊本の缺文をも補足することが出来たのである。是に於て初めて首尾元具、數百年を隔てゝ漸く再び原形に復したと云つてよかつ。尙ほ詳細は近刊の「農業經濟研究」に載せる筈である。